

夫婦を捉える計量的研究の試み：夫婦のリアリティに近づくために

○鈴木富美子（東京大学）

1. 問題意識

夫婦（関係）に関する研究は家族社会学の中でも関心の高いテーマである。夫婦間の会話や共同行動の頻度、夫の家事・子育てへのかかわり、家計の状況、サポートのありようが、夫婦—とりわけ妻—の満足度、幸福度、ディストレスなどの主観的意識とどのように関連するのかに数多くの計量的研究が行われてきた。

その際に主として用いられてきたのが、個人を対象として収集された調査票調査のデータである。これらのデータは、横断データであれ、パネルデータであれ、基本的には夫と妻は同一夫婦ではなく、別々の夫婦から抽出されている。従って、回答者本人とその配偶者間で行われる会話時間やサポートの授受などの相互行為やそれに対する満足度などとの影響関係は、あくまでも回答者本人の視点からみた夫婦関係である。

しかしながら、実際の夫婦、親子、友人などの対人関係において、同じ事象をみたり経験したりしても、それに対する感じ方や捉え方、印象が全く異なる場合があるという経験を私たちは日常生活で頻繁に経験しているように、夫もしくは妻のいずれか一方の視点からだけでは、夫婦像を描き出すのは不十分である。夫婦関係をどのように捉えるのかは、夫と妻では異なる可能性があるからである。夫婦関係を分析する際には、個人内の認識レベルにとどまらず、夫婦レベルで夫婦関係を捉える工夫が必要となる。

本報告では、横断データや夫婦ペアデータを用いて、妻と夫の双方の視点を組みこむことで、両者を対等な行為者（アクター）からなる夫婦として捉える試みを紹介する。データおよびその収集方法における制約のある中で、夫婦関係を「夫婦として」捉えることで、日常レベルで私たちが抱くリアリティに近づくことを試みたい。

2. データと分析事例

1つ目は横断データを用いた分析事例である。データは、公益財団法人 家計経済研究所が2014年に実施したwebによる「共働き夫婦の家計と意識に関する調査」である。ここでは女性票と男性票を別々に分析し、その両方を合わせていわば擬似夫婦のようなものを想定している。具体的には収入類型で両者をつなぐことで、どのような家計の運営をしている妻と夫で夫婦関係満足度の齟齬が大きいのかを検討した。夫婦ペア票ではないが、女性票と男性票を用いて夫婦それぞれを対等な行為者（アクター）として夫婦を擬似的に構成することで、「夫婦として」捉えようとしている。

2つ目は夫婦ペアデータを用いた分析事例である。データは、「高校卒業後の生活と意識に関する調査（高卒パネル調査）」（東京大学社会科学研究所）とその配偶者を対象とした夫婦ペアデータである。「高卒パネル調査」は、高校卒業を目前に控えた高校3年生に対し、2004年からパネル調査を実施してきた。対象者が30歳代となり、家族形成が進みつつあることから、2018年度から「高卒パネル調査」対象者の「配偶者」にも調査を行うことで夫婦ペアデータ化し、さらに夫婦ペアパネルデータへとデータ収集を進めている。まだ基礎的な分析の段階であるが、夫の家事・子育て関与をめぐる夫自身の評価と妻の評価の間には認識のズレがあること、夫と妻の認識がズレやすい項目とズレにくい項目があることなどが判明している。引き続き分析を行い、当日は結婚満足度との関係などを含め、より詳細は分析結果を報告する予定である。

【付記】

本報告では、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター 2017年度参加者公募型研究「夫婦データを用いた、家計、就業、子育てに関する二次分析」の成果を用いた。

キーワード：夫婦ペアデータ、夫の家事・子育て、夫婦関係満足度（結婚満足度）